



◇第60回 日本生物工学会大会（2008）後記◇

大会実行委員長 勝亦 瞭一

日本生物工学会の第60回大会が、平成20年8月27日（水）～29日（金）に東北学院大学土樋キャンパス（仙台）において開催されました。多数の会員のご参加と関連企業のご支援ならびに北日本支部の実行委員の皆さんのご協力を得て、無事に終了することができました。会場を拝借した東北学院大学の関係者を含め、皆様に厚くお礼申し上げます。本大会の実施結果につきまして以下に報告いたします。

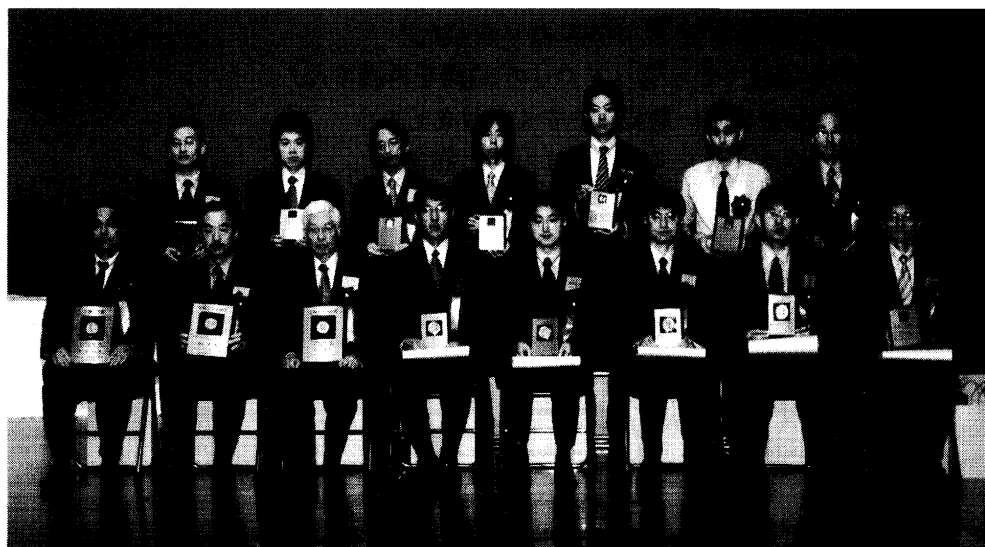
北日本支部の担当で行われる大会は平成12年度の札幌（北海道大学）での大会以来8年ぶり2回目となるが、仙台での開催は初めてであった。残暑が気がかりであったが、開期中は曇ないし小雨の比較的しのぎやすい天候となった。大会会場は、仙台市の中心街に位置し交通の便がよく、また各会場が隣接した建物にあって会場間の移動が容易であったため好評であった。

講演件数は一般講演527題、シンポジウム14テーマ82件、招待講演5件、受賞講演8件、併せて622件であった。一方、有料参加者数は正会員663名、学生会員312名、非会員275名の合計1,250名であった。ここ数年の大会に比べると、講演件数は一般講演が少なく、シンポジウムが多く、参加者は正会員・学生会員が減って非会員が増えたという結果であった。展示会には例年より多目の30社からの出展協力を得ることができた。

大会1日目午前中に授賞式がとり行われた。塩谷捨明会長の挨拶、授賞選考経過報告に続き、生物工学賞（五十嵐泰夫氏：微生物集団の構造と機能およびその利用に関する研究）、生物工学功績賞（園元謙二氏：新奇バクテリオシンの探索・発見とその利用）、生物工学功労賞（西山 徹氏：学会事業の発展に対する卓越した識見による貢献）、生物工学奨励賞（江田賞）2件（北垣浩志氏：清酒醸造における酵母ミトコンドリアの役割の解析とその育種への応用；山田 翼氏：清酒醸造工程における酵母のペプチド輸送調節と、その機構に着目した酵母の育種）、生物工学奨励賞（斎藤賞）（金山直樹氏：高親和性抗体の産生機構に関する基礎研究とその工学的応用）、生物工学奨励賞（照井賞）（柘植丈治氏：バイオプラスチックの環境低負荷型発酵生産法に関する研究）、生物工学技術賞（浅田雅宣氏ら：生菌入りシームレスカプセルの研究開発）、生物工学アジア若手賞（Dong-Myung Kim氏：Development of Highly Productive and Economical Cell-Free Protein Synthesis Systems）、生物工学論文賞7件（田代幸寛氏ら、知念秋人氏ら、佐藤 大氏ら、清水一憲氏ら、中川 強氏ら、小池美紀子氏ら、Marcela De Leon Gatti氏ら）の各賞が授与された。授賞式のあと、生物工学功労賞受賞者の受賞挨拶ならびに生物工学



東北学院大学



授賞式にて。前列向かって左から、五十嵐、園元、西山、北垣、山田、金山、柘植、浅田、後列向かって左から、Kim、田代、安枝、佐藤、清水、中川、黒澤。（敬称略）

賞、生物工学功績賞、生物工学技術賞、生物工学アジア若手賞の各賞受賞者による受賞講演が行われ、400名を超える聴衆から盛んな拍手が送られた。

1日目午後から2日目午前・午後、3日目午前にわたって一般講演、生物工学奨励賞3件の受賞講演、招待講演5件、14テーマのシンポジウムが行われ、各講演に対して熱心な議論が交わされた。また、1日目午後の後半に若手研究者を対象としてNPO法人サイエンス・コミュニケーションによる「若手理系人のためのキャリアセミナー」が行われた。終了後、引き続き場所を東北大学多元物質科学研究所大会議室に移して生物工学若手研究者の集い（若手会）総会・交流会が開かれた。約50名が参加し、実行委員会から提供された東北の銘酒もあって和やかな集いとなった。

以下に今大会に関する特記事項を記す。

- 1) 大会開催時期：会場となった大学の都合で夏休み最中の8月末に開催することになった。そのため講演登録締切りが5月初旬と例年よりずっと早くなった。このことが一般講演が減り、ひいては正会員・学生会員の参加者が少なくなった主因とみられるが、開催時期が一部の大学の大学院入試と重なったことも影響したと考えられる。大会はやはり9月下旬以降に開催するのが適切と思われる。
- 2) シンポジウム：近年、大会シンポジウムは、テーマを公募したためか、学会の各研究部会や関連研究会から提案されたテーマを中心に構成されており、話題が固定されている感があったので、今年度は公募を行わず、実行委員会主体で話題のバランスを考慮して企画し、最終的に14テーマをとり上げた。多様なテーマのシンポジウムが開かれたために、非会員の参加者数が近年で最多となったのではないと思われる。非会員の参加は会員増加の布石ともなりうるので、その観点も踏まえたテーマ構成に配慮すべきことを再認識した。
- 3) 展示会：講演会場の廊下を隔てた対面にある演習室6室を会場として行った。隣室に休憩室、廊下に論文賞展示コーナーとドリンクコーナーを設け、参加者が足を運びやすいように配慮した。会場が仕切られていたが、出展企業によると入場者にじっくり説明できてよかったとのことであった。
- 4) 懇親会：2日目午後6時30分から仙台国際ホテルにて懇親会を行った。招待者を含め約350名の参加を得て、ホテルで最も広い会場が狭く感じるほどの盛況ぶりであった。東北各県酒造メーカーおよびビール各社から提供いただいた各種酒類と料理がふんだんにとりそろえられ、皆様に満足いただけたものと思っている。展示会場に設けられたドリンクコーナーにも多数のメーカーから飲物をいただいた。各社のご厚意に感謝申し上げます。

最後に、本大会にご協力いただいた皆様に重ねてお礼申し上げます。



シンポジウム会場



懇親会・鏡割り

◇KSBB との交流 2008 年◇

国際交流担当理事 浅野 行蔵

日本生物工学会は、日本国内のみならず、東アジア・東南アジアとの連携をも重視して諸活動を展開している。その一例が、韓国の関連学会との連携であり、本年8月仙台市東北学院大学土樋キャンパスで開催された2008年度第60回生物工学会大会では、韓国の姉妹学会 Korean Society for Biotechnology and Bioengineering（韓国生物工学会、KSBB）より5名の講演者を招待し、大会プログラムにおいて招待講演として発表頂き、本会会員との交流を行った。また本年のアジア若手研究者奨励賞は、韓国のDong-Myung Kim博士（Chungnam国立大学）に決まっており、韓国－日本間の交流はますます盛況となっている。Kim博士受賞講演は、演題 Development of Highly Productive and Economical Cell-Free Protein Synthesis Systems.で行われた。Kim博士は、欧州米国のバイオベンチャーでの経験もあるアジアを軸に世界で活躍する実務的若手研究者であり、若手研究者奨励賞としてふさわしい好人物である。無細胞タンパク質合成系の技術発展の状況を彼の研究を基に講演された。

2008年度大会でのKSBBからの5名の招待講演者と演題は下記のごとくである。それぞれの講演では、本会理事の先生方を中心に座長の任をお引き受け頂いた。

1. Jung-Keug PARK教授（Dongguk大学化学生物工学科、ソウル）演題：Culture-expanded human dermal papilla and outer root sheath cells have biological activity *in vitro* and *in vivo*.
2. Yoon-Mo KOO教授（韓国生物工学会 会長、Inha大学生物工学科、インチョン）演題：Separation of rare sugars using a SMB chromatography.
3. Sun Bok LEE教授（Pohang大学化学工学科）演題：Non-phosphorylated metabolic pathways in the three domains of life.
4. Tai Hyun PARK教授（ソウル国立大学化学生物工学科）演題：Olfactory biosensor.
5. Jeong-Woo CHOI教授（Sogang大学化学生物工学科）、演題：Nanoscale biomemory device composed of self-assembled recombinant azurin.

大会第一日目の夜にミニ歓迎会を開き交流を深めた（写真）。

大会ともに行われている韓国生物工学会KSBBとの年次の交流会について経過を紹介する。

韓国での本会会員は、現在44名であり、そのほかに交流特別枠として学会誌を無料で相互交換していた。来年から本会の英文誌JBBが電子ジャーナル化されることに伴って、この交流も変更を余儀なくされた。

- 1) JBBの電子化に伴って、KSBB会員の希望者にはJBBアカウントを提供する。
- 2) KSBBの学会誌BBEを日本で勉強する韓国の留学生に宣伝する。KSBBは、海外学生のための特別会員制度を新設する方向で検討をする。日本での韓国人留学生の数は、中国に次いで多い。バイオ分野の留学生であっても自国のBBE誌を十分知っている可能性は少ない。日本の教員を通じて、韓国からの留学生に宣伝して、彼らの投稿の機会を増やす。BBE誌のインパクトファクターは1.6となっており、大いに投稿意欲をわかせる学会誌として成長している。
- 3) 相互交流について：年次大会への参加は従来3名と合意がなされ、双方で合意文が取り交わされていた（2005年）。本年の大会に参加するにあたって、KSBBからの人数を増加の要請があり、5人の招待を行うことにした。今後も同様な方法で進めることとした。予め招待希望のメンバーリストを本部に提出してもらい、本部了解の上、決定する。年次大会は各支部が本部とは独立した運営を行うため、本部ではきっちりと決めておくことが支部の混乱を防ぐことになる。

一方、KSBBの2008年度年次大会には、本会より塩谷捨明会長を団長として、技術賞受賞者の浅田雅宣博士（生物工学技術賞）（森下仁丹（株））、金山直樹博士（生物工学奨励賞・斎藤賞）（岡山大学大学院自然科学研究科・准教授）、柘植丈治博士（生物工学奨励賞・照井賞）（東京工業大学総合理工学研究科・講師）が招待されており、ミニ歓迎会にも参加され情報交換を行った。

また、タイにおいても学会誌の低料金での提供を行っていたが、本会誌の電子ジャーナル化に伴って、アカウント提供の形に変更が必要であり、韓国と同様の扱いとする方向である。その他のアジア中心の各国へも本会との交流を強めていく方向であり、具体的には学会誌のアカウント提供を進めていく予定である。

